

を併用すると肺癌の病巣部位も含め診断率が上昇する。

⑤ スキャン診断で肺腫瘍15例の確定診断は肺臓癌7例、肺のう腫2例、肝内胆管癌2例 Vater乳頭部癌2例、肝炎1例、不明1例、また肺炎としたもののうち手術で肺全般におよぶ肺臓癌が1例あった。⑥ Scanningの解像力は Rescan> Colorscan=Photoscan> Scinticamera> Dotscan の順によいことがわかった。

*

17. 胸骨旁リンパ節シンチグラフィの臨床的意義

荻野和彦 中西 敬 山田典将
中田太志
(山口大学 放射線科)

乳癌患者において胸骨旁リンパ節への転移の有用は、その患者の予後に少なからぬ影響を与えるものである。しかし現在では内胸静脈造影法により局所の状態を間接的に知りうるのみで、これとても患者に与える苦痛に対して診断的な意義は少ないとされている。そこでわれわれは、現状では胸骨旁リンパ節を連らねる内胸リンパ管を直接に造影不可能なために、KAZEM等の報告した¹⁹⁸Au—Colloidを用いた間接的な胸骨像リンパ節シンチグラフィに注目し、実施したところ、本法が胸骨像リンパ節の病態をある程度反映することを知った。手技の容易な点および患者に与える苦痛の少ない点より本法が、乳癌、胸壁腫瘍および前縦隔腫瘍等のスクリーニングテストになりうることを述べ、併せて2, 3の症例を供覧したい。

*

18. ⁸⁵Srによる下腿仮関節部骨再生能力の検討

鷺海良彦 樋口武彦 岸川 高
西谷 弘
(広島日赤病院 放射線科)
高岸直人 加川 涉
(同上 整形外科)

⁸⁵Srによる骨シンチグラムは、癌の骨転移、骨腫瘍、骨髄炎等の診断に利用されている。

骨折においても⁸⁵Srの集積像がみられる。そこで、われわれは骨折後の non unionあるいは、delayed unionの骨再生能力を術前に⁸⁵Srによってある程度、判定できるのではないかと考えた。

方法としては、⁸⁵SrCl₃ 100 μ Ci 静注、24時間後に島津製 SCC-130W スキャナーで Isosensitive scanningを行なう。体外測定は、静注後24時間、42時間、96時間の3回測定し患側と健側の ratio を算出した。症例は7例であるが、4例を供覧する。

症例1. (41才, ♀) 左上腕骨折
non union の状態でシンチグラムでは同部に陽性像がみられ、ratio は、2.0, 3.0, 4.0, であった。

症例2. (33才 ♂) 左腓骨骨折
non union の状態でシンチグラムでは同部に陽性像がみられ、ratio は、3.0, 3.0, 3.5 であった。

症例4. (43才 ♂) 左下腿骨折
delayed union の状態でシンチグラムは陽性像を呈し、ratio は、3.5, 4.0, 7.0, と非常に高かった。

⁸⁵Sr による検査は、レ線像で作られる information 以上に多くの information がえられる。

*

19. カテーテル型半導体放射線検出器による悪性腫瘍の診断

桜井 孝 横山 敬
(山口大学 放射線科)

悪性腫瘍は他の良性腫瘍にくらべて癌の取込みが多い。腫瘍内に取込まれた放射性燐を検出することにより悪性腫瘍の診断を試みた。測定した装置は東芝製カテリックス (RDP-302-1) カテリックスプローブは 2.3 mm ϕ 遮光型である。測定は放射性燐酸ナトリウム 500 μ Ci 静注、24~50時間後に行なった。測定した症例は食道癌例、食道腫瘍1例、縦隔洞腫瘍1例、網膜膠腫3例、悪性黒色腫1例であった。放射性燐の β 線の飛程の検討を行なったが、Aerylite phantom で測定した結果6 mm 厚で β 線はほとんど吸収された。測定結果の判定は組織学的に悪性であったもので30~80%の放射能増加を認めた。しかし良性と思われるものにも40%の増加を認めたものがあり、判定基準に関しては今後症例を重ねて検討したい。尚測定手技においても問題があり、できるだけカテリックスプローブの端窓を患部に密着、固定できるように器機の改良あるいは手技の改善が必要と思われる。

*